蘇芳集

初雪の富士

高橋　さえ子

草踏んでわが影ゆがむ水の秋

湯火照りの頬とも秋の夜の燈下

水尾ひろげ幽幽と鴨来たりけり

初雪の富士すつぽりと雲の影

富士の初雪病廊の明り取り

初雪の富士を仰ぎて回復期

富士の初雪働く街の灯のゆたか

新米

青山　丈

百花園萩を苅る日の書いてあり

本すこしずらし机に柿を剝く

敗荷は通りすがりに見るとする

目が笑ふとは本当や神無月

新米を炊く傍へ来て坐りけり

こゑ一つせず雪吊の吊り終へり

藪巻きは二人掛りで巻かれけり

日向

前田陶代子

コスモスの日向よ母とゐし日向
さざ波の尽きたる水草紅葉かな
蘆を薙ぐ風音ひしと蛇笏の忌
行く秋の草の水漬ける光かな
急磴に息つぐ桜もみぢかな
鳥渡る目の衰へを夫が言ふ
往き帰り見て満月のありどころ

秋遍路

宮尾直美

花野より還らぬ人を思ひけり
父いまも五十七歳曼珠沙華
身の影を水に映して秋遍路
父に似し遍路と出逢ふ花野道
秋風に押されて渡る沈下橋
あさがほの終の一花の大きこと
コスモスはコスモスとして暮れゆけり

秋の蝶

八木下末黒

一畝を薙倒しけり芋嵐
朝風のうねりの中の秋桜
職人の出を待つばかり松手入
松手入れ曲がりの松と高梯子
青空の光降りけり松手入
孟宗のふしぶし白く秋袷
しみじみと小さき黄色秋の蝶

菊供養

吉田幸敏

うつし世のはたて白花曼珠沙華
はしなくも触るる天網曼珠沙華
家居して糸瓜の水のよく溜まる
根岸へは行かず糸瓜の水を採る
童子思へば雨となりゆく菊供養
義仲寺の旅に破れたる芭蕉かな
あらそはぬことが口伝よ破芭蕉

月を見つけて

小川　美知子

白鷺が池の幅飛ぶ秋の雨
待てど待てどもつづれさせそれつきり
全履歴削除一瞬秋の蜂
月を見つけてそれからは月を見て
人形を抱く子を抱いて秋の風
たまに一人で深秋のコーヒー屋
冬近ければ青空はひたすらに

からあゐ

木内　憲子

自転車は何でも積めるねこじやらし
二人踏む二つの音を秋磧
秋蝶のひとつふたつがうるはしや
あきらかに月明を来し人のこゑ
からあゐや封書にけふの雨汚れ
あり余る時間などなし油点草
どの人も遠くて桜紅葉かな

おはやう

小島　みつ如

「おはやう」と庭へ無数の赤とんぼ
試歩はまづ夫の御墓に白露けふ
小鳥来る図鑑探すに散らかしぬ
紅白の萩に風生れ敬老日
墓原に満つる海光秋彼岸
鰯雲きて羊雲飛機旋回
充分に寝ておだやかに花芙蓉

水元

清水　裕子

水元の青き大橋燕去ぬ
橋を来る人に水の香秋闌くる
露草や計りも知れず命とは
草の実に群れて雀の数知れず
芒穂となる川風に顔吹かれ
歩みつつ川面に開く秋日傘
父が子に鳩吹く仕草見せてをり